

# 第二言語としての日本語のアスペクト習得研究概観

## - 「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に -

菅谷 奈津恵

### 要 旨

本稿は、アスペクト形式テイルの様々な用法のうち「動作の持続」と「結果の状態」を中心に、これまでの習得研究を概観し、今後の展望を探ることを目的とする。まず、日本語のテンス・アスペクト形式について簡単にまとめたあと、2つの観点からの研究をみていく。第一に、「アスペクト仮説」を検証した研究で、これは、テンス・アスペクト形態素の発達において動詞に内在する意味成分がどのように影響するかを論じたものである。次に、テイルの用法別の習得順序を調査した研究を検討し、現在までの研究成果をまとめる。

【キーワード】テイル、アスペクト仮説、自然習得、かたまり、母語の影響

### 1. はじめに

アスペクトは、テンスとともに時を表す基本的文法形式であり、言語学及び言語習得において重要な研究対象となっている（金田一 1950；工藤 1995；鈴木 1999；Bardovi-Harlig 1999, 2000；Comrie 1976；Li & Shirai 2000；Shirai & Andersen 1995）。いずれも、情報伝達の上でも重要な項目だが、成人第二言語学習者には習得が難しいと言われている（白井 1998；Klein, Dietrich & Noyau 1995）。

日本語の代表的アスペクト形式としてはテイル<sup>1</sup>が挙げられるが、第二言語としての習得研究では2つの観点からの研究が行われている。第一に、様々な言語に普遍的と言われている「アスペクト仮説」に基づいた研究である。第二に、テイルの様々な用法の習得順序を明らかにしようとする研究である。

いずれの観点でも焦点が当てられているのは、テイルの中心的用法とされる「動作の持続」と「結果の状態」である（許 1997b；黒野 1995；小山 1998；Ishida 2001；Shirai & Kurono 1998）。

そこで本稿では、「動作の持続」及び「結果の状態」のテイルを中心に日本語のアスペクト習得研究を概観し、今後の研究の展望を試みる。なお、アスペクト習得のレビューには、既に Li & Shirai (2000)、Shirai (2000b) があるが、本稿ではこれらにとりあげられていない魚住 (1998)、黒野 (1998c)、許 (2000a, 2000b) 及び菅谷 (2001b,

2002)、Ishida (2001) も加えて検討する。

### 2. 日本語のアスペクト形式

#### 2.1 日本語のテンス・アスペクト形式

習得研究を概観する前に、まず日本語のテンス・アスペクト形式についてまとめる。

テンスは、その文の表す事象が時間軸上のどの位置にあるかを示す形式である。発話時点は「現在」、現在より前の時点は「過去」、現在より後の時点は「未来」である（町田 1989）。次のように、動詞タイプはテンスを決定する上で重要な要因となる。

例1：机の上に本がある。

例2：一郎はアメリカに留学する。

上の2文の動詞にはいずれもルが使用されているが、例1が現在において成立している事象を示しているのに対し、例2では未来に成立するはずの事象を示している。「ある」、「いる」のように変化のない状態を意味するものは、「状態動詞」と呼ばれ、そのルは現在の事象を示すことができるが、これ以外の動詞のルは、習慣的な事象（例：毎朝8時に起きる）か、未来を示すことになる（町田 1989）。非状態動詞で現在の事象を表すためには、テイルが用いられる（例：一郎は今本を読んでいる）。

また、同じ事象でも、発話者の捉え方によって

表現形式が異なる場合がある。例えば、町田（1989：9）は、次のような例を挙げている。

例3：子供たちが公園で遊んでいた。

例4：子供たちが公園で遊んだ。

これらはいずれも、「子供たちが公園で遊ぶ」という事象が過去に成立したことを示しているが、例3では、「遊ぶ」という事象が持続する期間の中に視点を置いて表現されている。一方例2では、その事象を始発から終了まで含めてひとまとまりで表現している（町田 1989）。ル、タは、テンスでは非過去と過去と異なっているが、事象をひとまとまりで捉えるという点では共通しており、「完結相」を表す。また、テイル、テイタに関しては、どちらも事象の内部の容態に関心を払う形式であり、「非完結相」を示す（町田 1989）。なお、「完結相」、「非完結相」は、日本語学ではそれぞれ「完成相」、「継続相」と呼ばれることが多いが（奥田 1978；工藤 1995；高橋 1985）本稿では町田（1989）にならい、「完結相」、「非完結相」という名称を用いることにする。

以上の観点から、表1は町田（1989：152）及び工藤（1995：43）を参考に、日本語のテンス・アスペクト形式をまとめたものである。まず、動詞タイプは状態か非状態動詞かで分類することができる。さらに、非状態動詞で表示されるアスペクト的意味は、完結相と非完結相に分けられる。ただし、状態動詞であっても、状態性の比較的弱いもの（「思う」「違う」など）は、テイルで現在を表示することが可能である（町田 1989）。

表1 日本語のテンス・アスペクト形式

動詞 タイプ	過去		現在		未来	
	状態	非 状態	状態	非 状態	状態	非 状態
完結相		タ				ル
非完結相	タ	テイタ	ル	テイル	ル	テイル

## 2.2 テイルの用法

日本語のテンス・アスペクト形式を見てきたが、さらに、非完結相のテイルが表す意味は、次のように5つに分けられることが指摘されている（工藤

1982, 1995；寺村 1984；吉川 1976）。

- 1) 動作の持続（子供が公園で遊んでいる。）
- 2) 結果の状態（そこにペンが落ちている。）
- 3) 単なる状態（この道は曲がっている。）
- 4) パーフェクト（漱石はたくさんの小説を書いている。）
- 5) 習慣（彼は毎朝ニュースを見ている。）

「動作の持続」というのは、その動作・作用が行われている過程の途中にあることを示す。「結果の状態」というのは、ある動作・作用が行われた結果、変化した状態を表わす。例えば、「ペンが落ちている」というのは、「ペンが落ちた」結果生じた状態を示している。「単なる状態」というのは、「この道は曲がっている」のように、その状態をひきおこした動作・作用の過程が問題にならないものである（吉川 1976）。「パーフェクト」は、「経験」（吉川 1976）、「回顧」（寺村 1984）等の名称も用いられているが、ここでは工藤（1989, 1995）にならい、「パーフェクト」と呼ぶ。「習慣」は、同じ動作・作用がある一定の期間に習慣的に繰返されることを示す用法であり、「くりかえし」（吉川 1976）や「反復」（工藤 1982）と呼ぶ研究者もある。本稿では、Shirai（2000a）でも指摘されているように、瞬間的な動作が何度も行われることによって進行の意味を表す「繰返しの進行」（例：ケンがドアをたたいている）と区別するために、「習慣」という名称を採用する。

この5つのうち、「動作の持続」と「結果の状態」が中心的用法であり、他は派生的なものとしてされている（奥田 1978；工藤 1982, 1995；寺村 1984；吉川 1976）。派生的用法の中でも、「単なる状態」は「『結果の状態』と、きわめて近い関係にある」（吉川 1976：309）といわれている。例えば、同じ「曲がっている」という表現でも、「この釘は曲がっている」と言う場合、その釘はもともとはまっすぐだったのがあるときに曲がったので「結果の状態」になるが、「この道は曲がっている」の場合は初めから曲がっているため「単なる状態」になる（例文は金田一 1950）。しかし、いずれもまっすぐでない状態を表しており、やはり共通の意味を持っている表現だといえよう。このように、2つの用法はかなり近いものであり、「単なる状態」を「結果

の状態」の中に含め、テイルの用法を4つとしてとらえている先行研究もある(Jacobsen 1992 ; Shirai 2000a)。

なお、各用法の名称は研究者によって異なっているが、本稿では混乱を避けるため前出の5つの名称を用いることにする。

### 2.3 日本語母語話者の使用傾向

次に、日本語母語話者の使用頻度を見てみよう。

西・白井(2000)は、会話コーパス『主婦の一週間の談話資料』(井出 1984)を用いて、母語話者のテイル使用状況を調査しており、その結果は表2のようになった(%は筆者が加えた)。なお、西・白井(2000)では、「単なる状態」を「結果の状態」に含めており、4つの用法をたてて分析を行っている。

表2から、「動作の持続」と「結果の状態」の使用頻度はほぼ等しく、2つを合わせると全体の8割近くを占めていることがわかる。

表2 日本語母語話者のテイル使用状況  
(西・白井 2000 より再集計)

	動作の 持続	結果の 状態	パーフ ェクト	習慣	計
使用数	91	99	29	29	248
%	37%	40%	12%	12%	100%

## 3. アスペクト仮説

### 3.1 アスペクト仮説とはなにか

アスペクト仮説は、内在アスペクトと呼ばれる動詞の意味成分がテンス・アスペクト形態素の習得に、どう影響するかを論じたものである(白井 印刷中)。その起源は、第一言語習得研究に由来する(白井 1998 ; Andersen & Shirai 1994 ; Bardovi-Harlig 1999 , 2000 ; Gass & Selinker 2001 )。

例えば、Bronckart & Sinclair (1973) は、フランス語習得中の幼児(2歳11ヶ月~8歳7ヶ月)74人を対象に実験を行っている。Bronckartらは、おもちゃを用いて、結果の有無や頻度、持続性の点で異なる動作を提示した後で、その動作を話すように子供に求めた。既に起こったことを描写するという課題であったが、年齢の低い子供は異なるタイプの動作に対し、様々な動詞形を用いていた。はっきりとした結果を持った動作(例:人形がフェンスを飛

び越える)には完結相過去(複合過去 *passé composé*)<sup>2</sup>を使う割合が高く、そうでないもの(例:魚が洗面器をぐるぐる泳ぐ)には現在形を使うという傾向が見られた。こうした傾向は、年齢があがるにつれて弱まり、成人の使用に近づいていくことが報告されている<sup>3</sup>。

Antinucci & Miller (1976) は、英語を習得中の幼児1人とイタリア語を習得中の幼児7人の自然発話を分析し、過去形は、Bronckart & Sinclairと同様にはっきりした結果を持つ動詞に用いられやすかったことを報告している。

英語を母語とする幼児4人を対象にした Bloom, Lifter & Hafitz (1980)でも同様の結果が報告されている。Bloom et al.は、自然発話を分析し、-ingは持続的で非完結的(non-completive)な動詞に、-ed/不規則形過去は非持続的で完結的(completive)な動詞に、多く使用されていたと報告している。

その後、L1だけでなくL2習得においても、習得初期にはその動詞の意味成分に近い形態素をつけやすいという報告がされている(Robison 1990 ; Bardovi-Harlig & Reynolds 1995)。そこで観察された習得パターンは4つに分類できる(白井 1998 ; Andersen & Shirai 1994 ; Bardovi-Harlig 1999 ; Shirai 1991)。

- (1) (完結相)過去形はまず主に到達・達成動詞<sup>4</sup>に付加され、後に活動動詞、状態動詞にも使われるようになる。
- (2) 完結相過去と、非完結相過去の区別をする言語においては、非完結相過去の習得は完結相過去よりも遅れ、主として状態・活動動詞から始まる。
- (3) 進行形は、主として活動動詞から始まる。
- (4) 進行形を誤って状態動詞につけることは、ほとんどない。

上記の4点のうち、本稿と深い関係をもつのは(3)である。活動動詞は、「走る」「食べる」のように動的で持続性のあるものを示し(白井 1998) 概ね金田一(1950)の「継続動詞」に相当する。「動作の持続」のテイルは、主として活動動詞に結びついた用法である。一方、到達動詞は、「落ちる」「(電気が)つく」など持続的でなく動的で限界性があるものを指し(白井 1998) ほぼ「瞬間動詞」(金田一

1950)に相当する。「結果の状態」は、到達動詞に結びついた場合の用法である。従って、「動作の持続」と「結果の状態」の習得はどちらが早いという問題は、アスペクト仮説とも密接な関係を持つとされている(Li & Shirai 2000; Shirai 1995, 2000b)。

### 3.2 日本語におけるアスペクト仮説の検証

#### 3.2.1 2つの分析方法について

Shirai & Kurono (1998)によると、アスペクト仮説を検証するために2つの分析方法が行われている。第一に、学習者の発話データを収集し、使用された動詞形態素と動詞タイプの分布状況を調べ、母語話者の分布と比較する方法である。

第二に、その形態素が必要なコンテキストで、学習者がどの程度正しく形態素を用いているかを調べる方法であり(Shirai & Kurono 1998)、Shirai & Kurono (1998)と小山(1998)が文法性判断テストを用い、「結果の状態」と「動作の持続」の正用率を比較している。これ以外に、直接アスペクト仮説を論じたものではないが、「結果の状態」と「動作の持続」の正用率や出現順序を調査した研究が行われている(魚住 1998; 許 1997b, 2000a, 2000b; 黒野 1995, 1998c; 菅谷 2001b)。

しかし、この2種類の分析方法は、厳密には区別が必要である。活動動詞にテイルがついても、常に「動作の持続」になるわけではなく、「習慣」や「パーフェクト」の用法の場合もあるからである。例えば、「見る」を例に挙げると、以下は同じ「見ている」という形だが、用法は異なっている。

例5: 今ビデオを見ている。(動作の持続)

例6: 毎週末ビデオを見ている。(習慣)

例7: そのビデオならもう見ている。(パーフェクト)

同様に、到達動詞の場合も常に「結果の状態」になるわけではなく、「習慣」や「パーフェクト」の用法で用いられている可能性がある。

また、以下のように到達動詞(例8)や状態動詞(例9)でもある動作や現象が持続中であることを示す場合がある。

例8: ケンがドアをたたいている。

例9: 富士山がきれいに見えている。

では、実際に同じデータを動詞タイプとテイル

の用法という2つの観点から分析するとどうなるのだろうか。既に紹介した西・白井(2000)の調査では、日本語母語話者がそれぞれの動詞タイプをどの用法で用いているかも報告しており、ここで両者を比べてみよう。

まず、第一の分析方法、つまり動詞タイプ別のテイル使用数を比較すると、以下の通りになる(%は筆者が付け加えた)。

活動動詞: 75 / 248 (30%)

到達動詞: 155 / 248 (63%)

状態動詞: 18 / 248 (7%)

(西・白井 2000 より)

活動動詞の使用数は30%だけであるが、到達動詞はその2倍以上になっており、63%を占めていることがわかる。

次に、「動作の持続」と「結果の状態」の使用数を確認してみよう(%は筆者が付け加えた)。

「動作の持続」: 91 / 248 (37%)

「結果の状態」: 99 / 248 (40%)

(西・白井 2000 より)

「動作の持続」:「結果の状態」は、37%:40%と、大きな差はない。

このように、同じデータを用いて活動動詞:到達動詞の割合と、「動作の持続」:「結果の状態」の割合を算出すると、かなり異なる数値になっていることがわかる。だが、第一の分析方法である動詞の分布調査では、テイルが使用された動詞タイプのみを報告しているものがほとんどであり、その分析結果からは「動作の持続」と「結果の状態」のどちらが使用されているかは判断できない。また、「動作の持続」と「結果の状態」を比較したものに関しては、直説アスペクト仮説を論じた研究(Shirai & Kurono 1998; 小山 1998)では、動詞タイプと用法が明示されているが、これ以外の研究ではテイルの用法別の習得難易を焦点にしたものであり、動詞タイプについては言及されていない(魚住 1998; 許 1997b, 2000a, 2000b; 黒野 1995, 1998c; 菅谷 2001b)。

従って本稿では、2つの分析方法を分けて論じていくことにする。動詞の使用分布調査については、

3.2.2 から論じるが、「動作の持続」と「結果の状態」を比較した研究については第4節でとりあげる。

### 3.2.2 教室学習者を対象にした研究

動詞の使用分布調査では、いずれの研究でも、動詞タイプの判定に Shirai (1993, 1995) の判別テストが用いられている。調査対象者は、JSL 学習者を対象としたもの (Shirai 1995)、JFL 学習者を対象としたもの (Shibata 1998)、自然習得者を対象としたもの (Shibata 1999; 黒野 1998b; 菅谷 2002) が実施されている。ここではまず、教室学習者を対象にした研究を取り上げる。

Shirai (1995) は、8 ヶ月間の日本語集中コースを修了した中国人留学生3名に、日本語母語話者と一対一のインタビューを実施した。Shirai (1995) は、日本語母語話者 (インタビュー及びコーパス資料<sup>5</sup>) の発話も分析し、学習者の発話と比較を行った。日本語母語話者がテイルを使用した動詞タイプを分析した結果、活動動詞：到達動詞は、のべ数 (token count) でインタビューが 37% : 59%、コーパス資料が 32% : 64%と、到達動詞に多く用いられていることがわかった。一方、学習者3名のテイルの平均使用割合 (のべ数) は、活動動詞に 55%、到達動詞に 37%と活動動詞に多く、日本語母語話者とは異なる分布を示した (詳しい議論は Shirai & Kurono 1998 も参照されたい)<sup>6</sup>。

Shibata (1999) は、英語を母語とする日本語学習者、日本語母語話者各4名に物語の絵を用いたストーリーテリングを実施した。英語話者は、大学の日本語コース4年次に在籍する学生である。分析の結果、日本語母語話者4名のテイルの合計は、異なり数 (type count) で活動動詞が 45%、到達動詞が 55%であったが、のべ数では、活動動詞：到達動詞は 56% : 44%となっており、割合が逆転している。また、4名の学習者の使用したテイルは、異なり数で、活動動詞に 41%、到達動詞に 48%となっていた。しかし、のべ数では、活動動詞：到達動詞は 55% : 37%で、やはり活動動詞に多く用いていた。

このように日本語母語話者、学習者ともに、異なり数では到達動詞のほうが多く、のべ数では活動動詞のほうが多いというように、算出方法によって異なる結果になることが示された。ここから Shibata (1999) は、2種類の数値を示して論じる必要性を述べている。さらに、Shibata は分析資料の影響についても触れている。Shirai (1995) の日本

語母語話者の発話と比較すると、Shibata の日本語母語話者の方が活動動詞とテイルの割合が高くなっている。Shirai (1995) ではインタビュー会話を資料としているのに対し、Shibata (1999) ではストーリーテリングを分析しているため、タスクの違いが動詞の分布にも影響しているのではないかと述べている。

また、Shibata (1999) は、到達動詞にテイルがついた場合でも、必ずしも学習者が「結果の状態」で使っているわけではないことも指摘している。例として、崖から少年と犬が落ちていく絵の描写で、「みんな落ちている」という発話が挙げられている。これは、到達点に至るまでのプロセスに焦点を当てたものであり、英語からの影響である可能性を指摘している。

### 3.2.3 自然習得者

次に、自然習得者を対象にした研究では、黒野 (1998b)<sup>7</sup> が8人のポルトガル語を母語とする就労者の発話を分析している。調査開始時の通算滞日期間は10ヶ月から34ヶ月と様々である<sup>8</sup>。資料は、10ヶ月の期間を隔て行われたインタビュー2回分を使用した。分析の結果テイルは、1回目のインタビューでは8名の総使用数の66.7% (6/9) が活動動詞に使用されていたが、10ヵ月後のインタビューでは活動動詞は30% (3/10) だけであり、70% (7/10) は到達動詞に使用されていた。この結果は、10ヶ月の間に学習者のテイル習得が進んだことを示しているのだろうか。実際には、1人あたりのインタビュー時間が短かく<sup>9</sup>、8人の使用数を合計しても9回、10回と少ないため、黒野自身もデータの解釈についてはっきりしたことはわからないと述べている。

Shibata (1998) の対象者1名もポルトガル語を母語とする就労者 (滞日期間は5年) で、1時間のインタビューを用いて分析を行なった。その結果 Shibata は、テイル<sup>10</sup>の使用状況はアスペクト仮説と一致しなかったと述べている。しかし、Shibata の動詞分類は Shirai (1993, 1995) と正確には一致していなかったため、Li & Shirai (2000) が再分析を行なったところ、テイルは全て活動動詞に使われていることが確認された。ただし、Shibata の対象者が使用したテイルは、わずか2種類の動詞だけであった (「怒つとる」7回、「寝とる」1回)。

菅谷 (2002) は、3名 (L1 は英語、ロシア語<sup>11</sup>、

フランス語)の自然習得者を対象に調査を行った。ただし、このうちフランス語母語話者は、来日後約2年間自然習得をした後に、約8ヶ月(1.5時間×2回週)教室でのインストラクションを受けていた。3名の日本語レベルは、いずれもACTFL-OPI(Oral Proficiency Interview)<sup>12</sup>で初級の上という判定であった(滞日期間は1年4ヶ月~3年)。約25分のOPI発話を分析した結果、活動動詞:到達動詞のテイル使用数は、ロシア語母語話者には12:5(71%:29%)と活動動詞が多く用いられていることがわかった。一方、英語母語話者には3:12(20%:80%)、フランス語母語話者には3:13(19%:81%)と到達動詞が多く用いられていた(数字は全てのべ数)。なぜこの両者に到達動詞が多かったのかを調べたところ、フランス語話者のべ使用数は13と多いが、実際に使用したのは「知る」、「住む」という2種類の動詞だけであった。また、英語話者の場合には、以下のようにテイルが過剰使用されている例が見られた。

S: ぜんぶー、んー、チキンのうえー、スパイスに、置いています。そしたらーおs、お皿に、置いて  
います。 【チキンにスパイスをかけます。それから、お皿に置きます。】

なぜ「置いています」という形を使ったのかフォローアップインタビューで尋ねたところ、「ここに置いてください」という表現は聞いたことがあり、「置いて」という形は知っていたが、(マス形など)他の語形はわからないと答えていた。これは、テ形のインプットがテイルの使用に結びつくことを示唆しており、興味深い。

以上、教室学習者、自然習得者を対象とした研究をみてきたが、テイルを活動動詞に多く使用(Shirai 1995; Shibata 1998; 菅谷 2002 [ロシア語母語話者])、活動動詞、到達動詞の両方にほぼ同程度使用(Shibata 1999; 黒野 1998b)、到達動詞に多く使用(菅谷 2002 [英語・フランス語母語話者])というように異なる結果となっている。その要因としては、まず、Shibata (1999) が指摘するように収集資料の性質による違いが働いている可能性がある。さらに、それぞれの研究対象者の日本語レベルが異なっているという可能性もあるが、日本語レベルについては十分な情報が提供されていないため、研究

間で比較することができない。また、いずれも少人数を対象としたケーススタディであり、今後対象者を増やし、検証していく必要があるだろう。

#### 4. 「動作の持続」と「結果の状態」の習得

次に、「動作の持続」と「結果の状態」の用法を調査した研究を概観する。この中には、アスペクト仮説の検証として実施されたもの(Shirai & Kurono 1998; 小山 1998)も含めて論じる。

本節で取り上げる研究には、「動作の持続」と「結果の状態」の2用法だけを比較したもの(黒野 1995; 許 1997b [絵の描写タスク], Shirai & Kurono 1998; 小山 1998; 菅谷 2002)だけでなく、「習慣」や「パーフェクト」等、他の用法とともに調査したもの(許 1997b [文法テスト], 2000a, 2000b; 黒野 1998c; 魚住 1998; 菅谷 2001b; Ishida 2001)がある。後者については、用法の名称及び分類方法が研究者によって異なるため、整理が必要である。

##### 4.1 用法の名称の整理

各研究で「動作の持続」、「結果の状態」に当たる用法には、表3、表4のような名称が用いられている。

まず、「動作の持続」に対応する用法を確認しよう。表3にある許(2000a)、菅谷(2001b)の「状態の変化」は、「増えている」「多くなっている」のように動詞自体の語彙の意味や補助動詞の関係で、その状態が変化しつつあることを表す用法である<sup>13</sup>(許 2000a)。黒野(1998c)には、どのような分類を設定して分析を行っているかが明記されていないが、「現在ある現象が進行していることを表す用法」として挙げている例は、「-く/になる」と「発展する」という表現だけであるため、この「状態の変化」に相当する用法だと思われる。Ishida (2001)、魚住(1998)では、「状態の変化」という分類は特に設けられていない。また、許(1997b [文法テスト])及び許(2000b)は、いずれも文法テストによる調査だが、問題文を見ると、「状態の変化」に相当するものは含まれていない。

表3にまとめたように研究者により様々な名称及び分類基準が用いられているが、本稿では混乱を避けるため、各研究を検討する際は「動作の持続」、「状態の変化」という名称を用いることにする。さらに、「動作の持続」が示す範囲が研究者によって異なるため、「状態の変化」を含む分類を「動作の

持続 A」とし、「状態の変化」を含まない分類を「動作の持続 B」と呼んで区別する。

「結果の状態」についても、研究者ごとに名称は様々である。ここではいわゆる「結果の状態」だ

けでなく、「『結果の状態』と、きわめて近い関係にある」(吉川 1976 : 309)とされる「単なる状態」も含めてとりあげる。

表3 「動作の持続」に対応する用法

研究		動作の持続に対応	
Ishida (2001)		Progressive (進行)	
魚住(1998)		動作の継続	
許(1997b [文法テスト])		動作の持続	
許(2000b)		運動の持続(-長期)	
許(2000a), 菅谷(2001b)		運動の持続(-長期)	
黒野(1998c)		現在ある現象が進行していることを表す用法	
本稿での呼称	Ishida (2001), 魚住(1998)	動作の持続 A	
	許(1997b [文法テスト]), 許(2000b)	動作の持続 B	
	許(2000a), 菅谷(2001b)	動作の持続 B	
	黒野(1998c)	状態の変化 状態の変化	

表4 「結果の状態」に対応する用法

研究		結果の状態に対応	
Ishida (2001)		Resultative (結果の状態)	
許(2000a), 許(2000b), 菅谷(2001b)		結果の状態	性状(+可変性) 性状(-可変性)
魚住(1998)		結果の状態	慣用的用法【持っている、知っている、住んでいる、ことになっている】 形容詞的働き
許(1997b [文法テスト])		結果の状態	慣用法【持っている、覚えている、知っている】 形容詞的働き
黒野(1998c)		何かの出来事あるいは行為の結果生じた状態	「テイル」の形で状態を表すもの【持っている、知っている、住んでいる】
本稿での呼称	Ishida (2001)	結果の状態 A	
	許(2000a), 許(2000b), 菅谷(2001b)	結果の状態 B	
	魚住(1998), 許(1997b [文法テスト])	結果の状態 C	慣用的用法 単なる状態
	黒野(1998c)	結果の状態 C	慣用的用法

表4中の魚住(1998)の「慣用的用法」は、「持っている」、「知っている」、「住んでいる」、「ことになっている」が含まれるとされている。許(1997b)の「慣用法」は、これとほぼ重なり、「テイルの形で使われている時は、動きのない状態を表す『持っている』『覚えている』『知っている』」(許1997b : 38)を指すと説明されている。黒野(1998c)は、前述したように用法分類の設定が明

記されていないが、「『テイル』の形で状態を表すもの」として挙げられている動詞は、「持っている」、「知っている」、「住んでいる」である。そこで、これらの分類を本稿では暫定的に「慣用的用法」と呼んでおく。ただし、これらの動詞は実際には、「荷物は全部持ちました」のようにテイル以外の形式も用いられる場合があるため、「慣用的」という名称は今後検討が必要であろう。

吉川(1976)の「単なる状態」に相当する用法は、許(1997b [文法テスト])及び魚住(1998)では、「形容詞的な働き」、「形容詞的働き」とされている。本稿では、これらを「単なる状態」として扱うことにする。また、許(2000a, 2000b)、菅谷(2001b)では「単なる状態」を、その状態が変化しうかどうかという点で、「性状(+可変性)」(例:この歌は今はやっている)と「性状(-可変性)」(例:家から駅までは離れている)に二分している。これらはそのまま「性状(+可変性)」「性状(-可変性)」と呼んでおく。

表4に示すように「結果の状態」の示す範囲が研究者によって異なるため、「慣用的用法」と「単なる状態」を含む分類を「結果の状態A」とし、「慣用的用法」を含む「単なる状態」を含まない分類を「結果の状態B」、最も狭い分類を「結果の状態C」と呼んで区別する。

なお、「動作の持続」と「結果の状態」の2用法だけを比較したもの(黒野1995;許1997b [絵の描写タスク] Shirai & Kurono1998;小山1998;菅谷2002)については、A、B等の記号はつけず、そのまま「動作の持続」、「結果の状態」と記す。

#### 4.2 習得研究の結果

個々の研究結果を、教室でのインストラクションを受けている学習者と、日本語母語話者とのインターアクションの中で日本語を習得してきた自然習得者に分けて詳しく見ていくことにする。

##### 4.2.1 教室習得者

黒野(1995)<sup>14</sup>では、様々な母語の留学生14名のデータが分析されている。来日後3、6、9ヶ月目の3回にわたり文法性判断テストを実施し、テイルの「動作の持続」と「結果の状態」の習得を比較した。分析の結果、「結果の状態」は「動作の持続」よりも習得が困難であったと報告されている。

Shirai & Kurono(1998)は、留学生17名(L1は様々)を対象に、テイル(現在)及びテイタ(過去)の習得を分析したものである。来日後3、6、9ヶ月目の3回、「動作の持続」と「結果の状態」について文法性判断テストを実施した。17名を総合した正答率は、「動作の持続」のテイルが、55.9%

75.3% 69.4%であったのに対し、「結果の持続」のテイルは29.4% 31.4% 25.9%と期間を通してあまり変化がなかった。テイタについても、「動作の持続」は29.4% 40.2% 52.9%と上昇していた

が、「結果の状態」は30.6% 27.1% 27.1%と低いままだった。以上により、テイル、テイタいずれも、「動作の持続」よりも「結果の状態」のほうが習得が難しいということがわかる。また、同じ「動作の持続」の用法でも、現在のテイルのほうが過去のテイタよりも正答率が高いことがわかった。

許(1997b, 1997a, 2001)は台湾と日本で学ぶ中上級の台湾人学習者各30名に対し、口頭での絵の描写タスクと文法テストを実施した。絵の描写タスクでは、「結果の状態」よりも「動作の持続」のほうが容易であることがわかった。さらに、「結果の状態」の正用率を動詞毎に詳しく調べたところ、中国語で持続のアスペクト助詞「著」とともに用いられる動詞は正用率が80%以上と高かったが、完了の助詞“了”が用いられるものは正用率が60%以下で、タを用いる誤用が多かった。許はこの結果から、母語の中国語からの影響を示唆している。

許(1997b, 1997a, 2001)が実施した文法テストは、文中の空欄に動詞を適切な形に直して書くというもので、「動作の持続B」、「結果の状態C」、「慣用的用法」、「単なる状態」を含む計8つの用法からなる。分析の結果、正答率の高い順に、「慣用的用法」JSL89%、JFL82%、「単なる状態」JSL80%、JFL69%、「動作の持続B」JSL41%、JFL32%、「結果の状態C」JSL27%、JFL28%となっていた。「慣用的用法」と「単なる状態」の正答率が、かなり高いことがわかる。

さらに、許はこの調査からいくつか興味深い報告をしている。第一に、学習者がル、タとの対立としてではなく定型表現としてテイルを用いている場合があることである。「単なる状態」の中に「彼女はお母さんとよく似ています。」という問題文があったが、これは100%正答であったという(許1997a)。この問題文に対するフォローアップインタビューで、「『似ている』という表現は最初から『テイル』の形でしか覚えていない」と述べた学習者がいたことを報告している(許1997a:39)。第二に、JSLとJFLという学習環境による違いである。両グループの学習者はクローズテストによる日本語レベル判定はほぼ同じであったにもかかわらず、絵の描写タスクと文法テストのいずれも、JSL学習者のほうが正答率が高かった。この調査結果は、アスペクトのような形態素の習得で、インプットやアウトプットの機会の多い環境は、教室だけの学習より



も効果的であるという可能性を示唆していよう (Li & Shirai 2000; Shirai 2000b, in press-a)。

小山 (1998) は、中国語母語話者、韓国語母語話者を中心とした留学生 75 名に、文法性判断テストを実施した。小山の調査でも、母語に関わらず「結果の状態」は「動作の持続」よりも難しいことが示された。また、「動作の持続」の中でも「現在の持続」(テイル)の正用率が 84.7%と非常に高かったのに対し、「過去の持続」(テイタ)が 60.7%、「未来の持続」(テイル)が 36.8%と、大きな差が出たことが報告されている。

黒野 (1998c) では、3 名の留学生 (L1 はハンガリー語、タガログ語、ロシア語) を対象に、来日 9 ヶ月後、18 ヶ月後のインタビュー 2 回分を分析した (以降、数値は 3 名の学習者の合計)。「状態の変化」は、非使用 (テイルを使用すべき箇所に他の語形を用いたもの) が 9 ヶ月後に 2 例、18 ヶ月後 8 例観察されたが、正用例は見られなかった。正用が見られたのは、「結果の状態 C」と「慣用的用法」である。正用の出現は、「慣用的用法」が来日 9 ヶ月後に既に 13 回使用されているのに対し、「結果の状態」は、9 ヶ月後には非使用が 2 例で正用が見られず、18 ヶ月後に出現している。全体的な正用率及び使用頻度でも、「結果の状態」が 81%、13 回に対し、「慣用的用法」は 100%、25 回と上回っていた。「慣用的用法」の出現が早く、正用率も 100%と高いことについては、留学生が使用した教科書ではこれらの動詞がテイルという形で用いられるという説明があり、「常に『テイル』と共に使われる単語として記憶しているのではないか」と推測している。

魚住 (1998) では、ロシア人留学生 1 名を対象に分析を行っている。来日 9 ヶ月目から 24 ヶ月目まで 3 ヶ月おきに計 6 回、インタビューとストーリーテリング、ロールプレイを実施した。分析の結果、「慣用的用法」は、調査開始時から正用が用いられており、正用率も期間を通して 100%である。これについて魚住は、黒野 (1998c) 同様、テイルの形で記憶されている可能性を挙げている。「動作の持続 A」と「結果の状態 C」は、合計の正用率はいずれも 79 と等しい。だが、正用の出現を比べると、「動作の持続 A」が初回から現れているのに対し、「結果の状態 C」は 15 ヶ月目からと遅れていることがわかる。「単なる状態」は、期間を通し使用が

なかった。

次に、許 (2000a, 2001) は、K Y コーパス<sup>15</sup>を用いて中国語・韓国語・英語母語話者各 30 名 (各母語で初級・中級・上級・超級の 4 レベル) の発話資料を分析した。許は、「動作の持続 B」、「状態の変化」、「結果の状態 B」、「性状 (+ 可変性)」、「性状 (- 可変性)」を含む計 8 つのテイル (現在) の用法を対象に、義務的な文脈で正しく用いられているかどうかを検討した。分析の結果、「動作の持続 B」、「性状 (+ 可変性)」、「性状 (- 可変性)」、「結果の状態 B」、「状態の変化」という順序で正用が出現することがわかった。許は、得られた習得順序を、「現在性」「持続性」「運動性」という 3 要素をどのくらい持っているかというプロトタイプ性から説明を試み、「異なった言語体系を持つ学習者の間に、テイルの習得に関し普遍性が見られ、一定の習得順序を示した」(許 2000a : 28) と述べている。

しかし、中国語・韓国語・英語のアスペクト体系がどのような点で異なっているかに関しては、許は言及していない。習得が早いとされる「動作の持続 B」については、3 言語にこれに対応する言語形式があると指摘しており (許 2000a) 許自身、母語からの正の転移が働いている可能性を示唆している。母語に関わらない普遍的な習得順序かどうかを明らかにするためには、母語のアスペクト体系の異なる学習者で比較をする必要がある。例えば、ドイツ語のように進行形のない言語を母語とする学習者にも、許 (2000a) と同様の結果が得られるかどうかを調査する必要があるだろう (Shirai 2000b, in press-a)。

続いて許 (2000b, 2000c, 2001) は、中上級台湾人学習者 116 名 (JFL49 名、JSL67 名) に対しテイタ (過去) の文法テストを実施した。テストは、文中の空欄に動詞を適切な形に直して書くという形式で、「動作の持続 B」、「結果の状態 B」、「性状 (+ 可変性)」、「性状 (- 可変性)」を含め計 11 の用法を検討した。各項目 2 文ずつの調査文を、2 問とも正答すればその項目が習得されていると判断した。2 問とも正答した人の割合は、次のようになった。

JSL	JFL
性状 (+ 可変性) 63%	性状 (+ 可変性) 24%
動作の持続 B 39%	性状 (- 可変性) 6%
性状 (- 可変性) 18%	動作の持続 B 3%
結果の状態 B 10%	結果の状態 B 0%

JSL と JFL では「動作の持続 B」と「性状(-可変性)」が入れ替わってはいるが、概ね順番は一致している。しかし、JFL の正用者は、一番多い「性状(+可変性)」でも 24%であり、他の用法は 6%、3%、0%と割合がかなり低い。許(1997a)の調査同様、JFL 学習者よりも JSL 学習者のほうが正答率が高くなっていることがわかる。

Ishida (2001) は、ハワイ大学で日本語を学ぶ学習者 4 名(L1 は英語 3 名、中国語 1 名)を対象に、学習者と調査者の一対一の会話(1 回約 30 分)を週 2 回の間隔で合計 8 回ずつ行った。Ishida は、3 回目~6 回目の会話中にテイルの誤用に対する「言い直し」のフィードバック(recast)<sup>16</sup>を行い、テイルの正用率との関連を分析した。その結果、「言い直し」を与えた 3 回目以降正用率は上昇し、7 回目、8 回目の会話でも正用率は高いまま維持されたことがわかった。

テイルの用法別正用率では、「動作の持続 A」と「結果の状態 A」を比較したところ、調査 1 回目が 14.29% : 40%、8 回目が 42.86% : 89.47%というように、調査期間を通じ常に「結果の状態 A」のほうが上回っていることがわかった。これは、他の先行研究と反対の結果になったわけだが、Ishida はその要因として、教科書にテイルで定形的な表現として導入されているものをかたまりとして使用していた可能性を指摘している。また、学習者が使用していた教科書では、「結果の状態」が約 6 ヶ月目に導入されるのに対し、「動作の持続」は 12 ヶ月目とかなり遅れて導入されることも、影響したのではないかと述べている。Ishida の調査は、インストラクションの順序とテイルの習得に与える影響を考える上で非常に興味深い結果となっている(Shirai, in press-a)。ただし、「結果の状態 A」のテイルがかたまりで使用されていたのかどうかという点については、Ishida にはかたまりの判断基準が明示されていないため、ここでは論じていくことができない。

#### 4.2.2 自然習得者

自然習得者を対象にした研究は、まだ数が少ない。菅谷(2001b, 2001a)は、2 年間の自然習得後に教室学習を開始したロシア語母語話者 Alla に対し、10 ヶ月間の縦断調査を行った。対象者は日本人の配偶者を持ち、滞日期間は調査開始時に約 2 年であった。菅谷は同時に、来日直後からインストラクションを受けている Vera(L1 ロシア語: 進行形

なし<sup>17</sup>)と Jyoti, Ruby(L1 テルグ語、マラティ語: とともに進行形あり<sup>18</sup>)のデータも分析し、母語の進行形の有無と習得環境の違いという観点から 4 名の発話を比較した。4 名の日本語レベルは、調査開始時に OPI 初級の上、終了時には中級の下~中という判定である。日本語母語話者との一対一のインタビュー約 15 分を毎週実施し、用法別のテイル(現在)の出現を調査した。

分析の結果、Jyoti と Ruby には、「動作の持続 B」「性状(-可変性)」「性状(+可変性)」「結果の状態 B」(「状態の変化」は使用なし)という出現順序が観察された。一方 Vera(L1 ロシア語)には、「動作の持続 B」,「結果の状態 B」「性状(-可変性)」「性状(+可変性)」と「状態の変化」は使用なし)となっており、「動作の持続 B」と「結果の状態 B」は同時期に出現していた。だが、使用動詞を詳しく見ると、「結果の状態 B」に使用されたのは「知ってる」、「知っています」という 2 例だけであったのに対し、「動作の持続 B」では、「飲んでいます」、「探しています」と異なる動詞を用いていた。「知る」は Vera が使用していた日本語教科書<sup>19</sup>でも、「知っています」という形で提出されており、テイルで記憶されていた可能性が高い。従って、「知る」を除けば、3 名の教室学習者 Jyoti, Ruby, Vera は、母語の進行形の有無に関わらず、「動作の持続 B」が「結果の状態 B」よりも早く出現していたと考えられる。

自然習得をしてきた Alla(L1 ロシア語)には、他の 3 名とはかなり異なる傾向が見られた。出現順序を見ると、「動作の持続 B」,「結果の状態 B」「性状(-可変性)」「性状(+可変性)」「状態の変化」となっており、調査開始当初から「動作の持続 B」と「結果の状態 B」の両方を頻繁に使用していた(総使用数は「動作の持続 B」:「結果の状態 B」で 48 : 56)。「結果の状態 B」が多く用いられた要因として、本稿の 2 節で取り上げたように日本語母語話者の日常会話では「結果の状態」が多く使用されているという報告があり(西・白井 2000)、日本人配偶者である Alla には「結果の状態」のインプットが多かったことが考えられる。また、Alla には、常にテイルで使用された動詞(知る、持つ、つく)が見られたことから、かたまり<sup>20</sup>として語彙的に習得されていたのだと推測される。ただし、Alla には「結果の状態 B」だけでなく、「動作の持

続 B」にもかたまりで使用された動詞（待つ）があったが（菅谷 2001a）分析資料がインタビューであったことから、各用法でル、タとテイルの使い分け規則がどの程度習得されているのかは明らかではない。

なお、「性状（-可変性）」と「性状（+可変性）」に関しては、4名が使用した動詞はほぼ「似る」「混む」に限定されており、かつ、この2つの動詞は常にテイルで用いられていたため、「似ている」「混んでいる」という表現が語彙項目として習得された可能性が考えられる。

続いて菅谷（2002）は、英語母語話者1名（滞日期間1年4ヶ月）とフランス語母語話者1名（滞日期間約3年）を対象に調査を行った。フランス語母語話者は、来日後約2年間自然習得をした後に、約8ヶ月（1.5時間×2回週）教室でのインストラクションを受けていたが、英語母語話者には教室での学習経験はなかった。両者の日本語レベルは、いずれも OPI（Oral Proficiency Interview）で初級の上という判定であった。絵の描写タスクを用い、「動作の持続」と「結果の状態」の正用率を比較した。分析の結果、英語母語話者は「動作の持続」のテイル正用率が100%、「結果の状態」は82%であった。また、フランス語母語話者の場合は、「動作の持続」の正用が42%、「結果の状態」が30%で、やはり「動作の持続」のほうが上回っていることがわかった。この結果から菅谷（2002）は、自然習得者にも文法規則としての習得は「動作の持続」のほうが早いということ推測している。

さらに、両者の「動作の持続」の正用率を比べると、英語話者が100%であったのに対し、フランス語話者は42%と低く、残りの58%にルを用いていた。こうした結果の要因として考えられるのは、まず、母語の影響であろう。進行中の動作を表す際に、英語では ing の使用が義務的なものに対し、フランス語の *etre en train de* は特に進行中であることを強調する場合にのみ使用され、通常は動詞の現在形が使用される（松井 1972）。従って、「動作の持続」のテイルにおいて、英語話者には正の転移が予想されるが、フランス語話者にはそれがなかったことが考えられる。もう一つの可能性は、単純にこのフランス語母語話者のほうが、動詞形態素の習得が全体に遅れているということである。「動作の持続」だけでなく「結果の状態」についても、フラン

ス語話者のほうが低くなっており、2番目の説明も十分に可能性があるだろう。

#### 4.2.3 研究結果のまとめ

以上、本節で概観してきた研究を表5、6にまとめる。まず、「動作の持続」と「結果の状態」の2用法だけを比較した調査結果は、表5ようになる。データ収集方法（文法性判断テスト、口頭での絵の描写タスク）や調査対象者（JSL・JFL 教室学習者、自然習得者）は研究により異なるが、いずれも「結果の状態」のほうが「動作の持続」よりも難しいという結果が出ていることが確認できる。

次に、様々な用法を調査した研究の結果を表6にまとめる。4.1で述べたように、各用法の名称は研究者によって異なっているが、本稿では混乱を避けるため以下の呼称を用いている。各研究で使用されている名称との対応は、表3、4で確認されたい。

「動作の持続」に相当：「動作の持続 A/B」<sub>1</sub>、「状態の変化」

「結果の状態」に相当：「結果の状態 A/B/C」<sub>2</sub>、「慣用的用法」<sub>3</sub>、「単なる状態」<sub>4</sub>（「性状（+可変性）」<sub>5</sub>、「性状（-可変性）」<sub>6</sub>）

なお、主な結果の欄では、「動作の持続」に相当する用法に、\_\_\_\_ をひいてある。

表6の黒野（1998c）、許（2000a）、菅谷（2001b）を見ると、「動作の持続」に相応する用法の中でも、「状態の変化」の習得は難しいことがわかる。いずれも、「状態の変化」は「結果の状態 B/C」よりも出現が遅くなっている。また、許（2000a）と菅谷（2001b）で「動作の持続 B」と「状態の変化」を比較すると、「動作の持続 B」が早く出現するのに対し、「状態の変化」の出現は他の用法より遅くなっていることがわかる。

続いて「結果の状態」に相当する用法を検討してみよう。「慣用的用法」（知っている、持っている等）は、この用法を設定している黒野（1998c）魚住（1998）許（2000b）ではいずれも正用率が最も高くなっている。特に、黒野（1998c）と魚住（1998）では、4.2で見えてきたように正答率は100%で、出現も早く、容易であることがわかる。

また、「単なる状態」（許 2000a；菅谷 2001b では「性状（±可変性）」）も比較的容易なようであり、ほとんどの研究で「結果の状態 B/C」よりも正用率

あるいは出現順で上回っており(許 1997b, 2000a, 2000b; 菅谷 2001b [教室習得者]), 「動作の持続 B」よりも正用率が高くなっている研究も見られる(許 1997b, 2000b)。「慣用的用法」と「単なる状態」が容易であった理由として、「『似ている』という表現は最初から『テイル』の形でしか覚えていない」(許 1997a: 39)という学習者のコメントが示すように、テイルでかたまりとして使用された可能性が考えられる(魚住 1998; 黒野 1998c; 菅谷 2001b)。

表5 「動作の持続」と「結果の状態」の2用法を比較した研究の結果

研究	対象項目	資料	対象者(L1)	主な結果(正用率)
黒野(1995)	テイル	縦断(来日 3,6,9ヶ月目)・文法性判断テスト	初級留学生 14人(様々)	・動作の持続 > 結果の状態
Shirai & Kurono (1998)	テイル テイタ	縦断(来日 3,6,9ヶ月目)・文法性判断テスト	初級留学生 17人(様々)	・動作の持続 > 結果の状態 ・動作の持続:テイル > テイタ
小山(1998)	テイル(現在、未来) テイタ	横断・文法性判断テスト	初級～中級留学生 75(中国語 25, 韓国語 25, 非漢字 25)	・動作の持続 > 結果の状態 ・現在の動作の持続 > 過去の動作の持続 > 未来の動作の持続
許(1997b)	テイル	絵の描写タスク	中上級台湾人 JSL30人, JFL30人(中国語)	・動作の持続 > 結果の状態 ・JSL > JFL
菅谷(2002)	テイル(現在)	絵の描写タスク	OPI 初級上・自然習得 2人(英語, フランス語)	・動作の持続 > 結果の状態

表6 他の用法も含めて調査を行った研究の結果

研究	対象項目	資料	対象者(L1)	主な結果(正用率または出現順)
許(1997b)	テイル	文法テスト	中上級台湾人 JSL30人, JFL30人(中国語)	・正用率: 慣用的用法 単なる状態 <u>動作の持続 B</u> 結果の状態 C ・JSL > JFL
黒野(1998c)	テイル	縦断(来日 9,18ヶ月目)・インタビュー	留学生 JSL3人(ハンガリー語, タガログ語, ロシア語)	・出現と正用率: 慣用的用法 結果の状態 C <u>状態の変化</u>
魚住(1998)	テイル	縦断(来日 9,12,15,18,21,24ヶ月目)・インタビュー, ストーリーテリング, ロールプレイ	留学生 1人(ロシア語)	・正用率: 慣用的用法 <u>動作の持続 A</u> , 結果の状態 C ・出現: 慣用的用法 <u>動作の持続 A</u> 結果の状態 C (単なる状態 は使用なし)
許(2000a)	テイル(現在)	横断・KY コーパス	OPI 初～超級 90人(中・韓・英各 30)	・出現: <u>動作の持続 B</u> 性状(+可変性) 性状(-可変性) 結果の状態 B <u>状態の変化</u>
許(2000b)	テイタ(過去)	文法テスト	中上級台湾人 JSL49人, JFL67人(中国語)	・正用率: JSL: 性状(+可変性) <u>動作の持続 B</u> 性状(-可変性) 結果の状態 B JFL: 性状(+可変性) 性状(-可変性) <u>動作の持続 B</u> 結果の状態 B ・JSL > JFL
Ishida(2001)	テイル	会話(週 2回, 合計 8回)	大学生 JFL4人(英語 3, 中国語 1)	・正用率: 結果の状態 A <u>動作の持続 A</u>
菅谷(2001b)	テイル(現在)	縦断(週 1回 × 10ヶ月)・インタビュー	OPI 初級上 JSL 教室習得 3人(テルグ語, マラティ語, ロシア語) 自然習得 1人(ロシア語)	・出現: 教室習得者 <u>動作の持続 B</u> 性状(-可変性) 性状(+可変性) 結果の状態 B <u>状態の変化</u> 自然習得者 <u>動作の持続 B</u> , 結果の状態 B, 性状(-可変性) 性状(+可変性) <u>状態の変化</u>

次に、「動作の持続 A/B」と「結果の状態 A/B/C」を比較する。概ね「動作の持続 A/B」のほうが「結果の状態 A/B/C」よりも容易になっているが（許 1997b, 2000a, 2000b；魚住 1998）他の研究結果と異なっているのは、Ishida（2001）と菅谷（2001b）である。Ishida（2001）では「動作の持続 A」よりも「結果の状態 A」の正用率のほうが高く、菅谷（2001b）のロシア人自然習得者は、調査開始当初から「結果の状態 B」と「動作の持続 B」を多用していた。なぜ、こうした結果が得られたかという点については、導入順序の影響（Ishida 2001）やかたまりとしての使用（菅谷 2001b；Ishida 2001）、習得環境の影響（菅谷 2001b）などが挙げられていることを 4.2.1、4.2.2 で取り上げた。

ここでさらに注意が必要なのは、以下の 2 点である。第一に、表 3、4 で示したように、研究者によって「動作の持続」及び「結果の状態」に含まれる範囲が異なる点である。例えば、許（1997b）や魚住（1998）では、「結果の状態」に対応する用法は「結果の状態 C」、「慣用的用法」、「単なる状態」の 3 つに細分されているが、Ishida（2001）ではこれらが全て「結果の状態 A」に分類される。同様に、菅谷（2001b）の「結果の状態 B」には、許（1997b）や魚住（1998）の「慣用的用法」が含まれる。従って、「『結果の状態』のほうが『動作の持続』よりも先に習得される」という報告がされた場合でも、実際には「知っている」、「持っている」のような「慣用的用法」や「単なる状態」にあたるものが使用されていただけの可能性がある。

第二に、なにをもってテイルが習得されたとみなすかという点である。例えば、「知る」や「持つ」という動詞を、学習者が「知っている」、「持っている」というかたまりで記憶していたとしても、発話中にテイルが適切な文脈しかない場合は、正用率は 100%になる。しかし、ル、タ、テイルの使い分けができるかどうかを含めて考えると、文法規則としてはまだ習得されていないということになる。こうした観点にたつと、Ishida（2001）、菅谷（2001b）ではかたまりでテイルが使用された可能性が述べられており、「動作の持続」と「結果の状態」のどちらが文法規則としての習得が進んでいるのかは判断ができない。

さて、これまでかたまりとしてのテイルの使用について繰り返し触れてきたが、第二言語習得研究全

般において、「かたまり」の判定基準が曖昧であることが指摘されている（Weinert 1995）。菅谷（2001b）では、テイルしか使用されなかった動詞をかたまりと名づけているが、この中には単にル、タが使用される文脈がなかった場合もありうる。特に、使用頻度が少ない場合は、こうした可能性が高い。かたまりの操作定義を、今後明確にしていかなければならないだろう。

また、テイルでかたまりとして習得される動詞がある場合には、なぜその動詞がかたまりで記憶されるのであろうか。考えられるのは、まず、インストラクションの影響である。つまり、はじめからテイルで提示された動詞は、その形で記憶されやすいという可能性である（黒野 1998c；魚住 1998；菅谷 2001b；Ishida 2001）。次に挙げられるのは、日本語母語話者からのインプットの影響であろう。特に日本語話者とのインターアクションの中で日本語を習得した自然習得者には、その動詞がどんな語形で多く使用されているかという点が大きく影響するのではないだろうか。これについては、日本語母語話者の会話資料から、個々の動詞の使用語形を調査し、学習者の発話と比較していくことが考えられる。

## 5. 今後の課題

以上、第二言語としての日本語のアスペクト習得について、アスペクト仮説を検証した研究と、用法別の習得順序を調査した研究を概観してきた。近年研究は増えてきているが、いくつか課題も残っている。

第一に、対象者に関しては、自然習得者と母語に進行形のない学習者の調査が非常に少ない状況である。習得環境及び母語の影響を検証するために、両者を対象にした研究が必要である。例えば Shirai（2001, in press-a）は、（1）自然習得者と教室習得者（L1 は同じ）との比較、（2）母語に進行形のある学習者と進行形のない学習者の比較（習得環境は同じ）というように、要因をコントロールした調査を行っていく必要性を述べている。

第二に、分析方法については、用法別の調査を行った研究とアスペクト仮説で唱えられている普遍性を統合するためには、動詞タイプ（到達動詞、活動動詞など）とテイルの用法（「動作の持続」、「習慣」など）の 2 つの情報を提示する必要があるだろう（Shirai, in press-b）。

第三に、調査方法に関しては、自由発話だけでなく文法性判断テストや絵の描写等の誘出データを組み合わせることが望ましい。黒野(1998c)や菅谷(2001a)が示唆するように、学習者がかたまりとしてテイルを習得する場合があるとすれば、テイルの使用を個別に調査するだけでは不十分である。ル、タとの使い分けを総合的に分析し、文法規則として「動作の持続」と「結果の状態」のどちらが先に習得されるのかを明らかにする必要があるだろう。

また、調査に当たっては、日本語能力と習得状況の関係を把握するために日本語レベルの測定が不可欠である。追検証を可能とするためにも、客観的な方法でのレベル測定が望まれる。

謝辞：本稿の執筆にあたり、コーネル大学の白井恭弘先生から貴重なご教示を賜りました。ここに記して謝意を表します。

#### 注

1. 以降、特に指摘のない箇所では、現在の「テイル」と過去の「テイタ」の総称としてテイルを使用する。
2. フランス語の過去形には、複合過去 (*passé composé*)、半過去 (*imparfait*)、大過去 (*plus-que-parfait*)、単純過去 (*passé simple*)、前過去 (*passé antérieur*) の 5 種類があるが、うち単純過去と前過去は、現代フランス語ではほとんど使用されない。複合過去は、過去に完了し、その結果が何らかの形で現在に関わりを有する動作を、半過去は、過去において継続していた動作を表現する。大過去は、過去に基準となる時点を定めて、それ以前に起こった動作を表す (西本 1982)。
3. 非完結相過去を表す半過去は、使用数が非常に少なく、7 歳以上の子供に多少使用されただけであった。
4. 活動動詞 (Activity)、到達動詞 (Achievement)、達成動詞 (Accomplishment)、状態動詞 (State) という名称は Vendler (1967) による動詞分類である。訳語は影山 (1996) にならった。
5. 井出祥子編 (1984) 『主婦の一週間の談話資料』から無作為に 50 のテイルを抽出し、分析を行っている。
6. Shirai & Kurono (1998) は、Shirai (1995) に黒野 (1994, 1995) の再分析データを加え、アスペクト仮説について詳しく論じたものである。
7. 黒野 (1998b) は、黒野 (1998a) と同じデータを用いた研究である。黒野 (1998a) では、動詞形態素だけでなく名詞や副詞、ディスコース構成等も含め、どのように時間概念が表現されるかが分析されている。
8. 調査対象者の滞日期間については、土肥 (1998: 第 2 部) を参照した。
9. 黒野 (1998a, 1998b) には、インタビュー時間については言及されていないが、前述の土肥 (1998: 第 2 部)

を見ると、インタビューは「予定所要時間 15 分」と記述されている。

10. 名古屋方言のアスペクト形式「-トル」が使用されている。
11. 菅谷 (2002) のロシア語母語話者は、菅谷 (2001a, 2001b) の自然習得のロシア語話者と同一人物である。
12. OPI は、ACTFL (American Council on the teaching of Foreign Languages; アメリカ外国語協会) によって開発された面接による外国語の口頭能力測定方法である (鎌田 1996)。
13. ただし、「増えている」や「- なっている」は常に「動作の持続」の意味になるわけではなく、「結果の状態」を表す場合もある。例えば、「- なっている」が「結果の状態」で用いられている例が、吉川 (1976: 178-179) に数多く挙げられている。
14. 黒野 (1995) 及び Shirai & Kurono (1998) の研究 2 は、黒野 (1994) と同じデータを再分析したものである。
15. KY コーパスは、平成 8-10 年度科学研究費補助金基盤研究「第二言語としての日本語の習得に関する総合研究」(カッケンブッシュ寛子代表) において、鎌田修氏と山内博之氏を中心に作成された OPI コーパスである。
16. 「言い直し」(recast) は、学習者の発話に誤りがある際、発話の意味を維持しながら誤り部分を修正するフィードバック方法である (Gass & Selinker 2001: 286)。
17. ロシア語には進行形がなく、習慣的に行われる動作と現在進行中の動作は、非完結相という全く同じ形式で表現される (桑野 1996, Comrie 1990)。
18. テルグ語、マラティ語に関しては、Krishnamurti & Gwynn (1985)、Rajeshwari (1997) を参照した。
19. 『みんなの日本語』スリーエーネットワーク。
20. 菅谷 (2001a) でかたまりとみなしているのは、ル、タが見られず、テイル形だけで 5 回以上使用された動詞である。教室学習者 3 名には、かたまりと判断されたものはなかった。

#### 参考文献

- 井出祥子編 (1984) 『主婦の一週間の談話資料 解説・本文編』文部省科学研究費補助金特別研究「情報化社会における言語の標準化」総括班刊行物
- 魚住友子 (1998) 「追跡調査に見られる『～ている』の習得状況」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』平成 7-9 年度科学研究費報告書 100-111.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐる」『教育国語』53, 54
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 - 言語と認知の接点』くろしお出版
- 鎌田修 (1996) 「OPI」鎌田修・川口義一・鈴木睦編 『日本語教授法ワークショップ』凡人社 196-216.
- 許夏珮 (1997a) 「中上級台湾人日本語学習者による『-テイル』の習得に関する横断研究」お茶の水女子大学大学院修士論文 (未公開)

- 許夏珮 (1997b) 「中上級台湾人日本語学習者による『-テイル』の習得に関する横断研究」『日本語教育』95, 37-48.
- 許夏珮 (2000a) 「自然発話における日本語学習者による『-テイル』の習得研究: OPI データの分析結果から」『日本語教育』104, 20-29.
- 許夏珮 (2000b) 「中・上級台湾人日本語学習者によるテイルの習得に関する研究」『言語文化と日本語教育』19, 49-61.
- 許夏珮 (2000c) 「日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得に関する研究 - 個別性と普遍性」『第11回第二言語習得研究会全国大会予稿集』76-83.
- 許夏珮 (2001) 「日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得に関する研究」お茶の水女子大学大学院博士学位論文 (未公開)
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15 (金田一春彦編 1976 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 5-26 に再録)
- 工藤真由美 (1982) 「テイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』第13巻4号, 54-118.
- 工藤真由美 (1989) 「現代日本語のパーフェクトをめぐって」言語学研究会編『ことばの科学・3』むぎ書房 53-118.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 黒野敦子 (1994) 「日本語学習者におけるテンス・アスペクトの習得について」名古屋大学大学院修士論文 (未公開)
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者における『-テイル』の習得について」『日本語教育』87, 153-164.
- 黒野敦子 (1998a) 「就労を目的として滞在している外国人のテンス・アスペクトの習得について」『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の研究』平成 6-8 年度科学研究費研究成果報告書 32-40.
- 黒野敦子 (1998b) 「就労を目的として滞在している外国人のテンス・アスペクトの習得について」未発表論文
- 黒野敦子 (1998c) 「留学生の発話に見られるテンス・アスペクトの誤用について」『研究留学生にみられる日本語発話能力の変化と日本語使用環境に関する基礎的研究』平成 7-9 年度科学研究費研究成果報告書 112-124.
- 桑野隆 (1996) 『エクスプレス・ロシア語』白水社
- 小山悟 (1998) 「日本語学習者のテンス・アスペクトの習得」第9回第二言語習得研究会全国大会発表原稿, 名古屋大学 12月20日
- 白井恭弘 (1998) 「言語学習とプロトタイプ理論」奥田祥子編『ポーターレス時代の外国語教育』未来社 70-108.
- 白井恭弘 (印刷中) 「動詞の意味特性と動詞形態素の習得: プロトタイプ形成と生得性」大堀壽夫編『認知言語学 (2) カテゴリー化』東大出版会
- 菅谷奈津恵 (2001a) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究: テイルを中心に」お茶の水女子大学大学院修士論文 (未公開)
- 菅谷奈津恵 (2001b) 「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究」第38回第二言語習得研究会発表資料, お茶の水女子大学 10月31日
- 菅谷奈津恵 (2002) 「日本語のテンス・アスペクト習得に関する事例研究: 自然習得をしてきた露・英・仏語母語話者を対象に」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成 12-13 年度科学研究費研究成果報告書 102-114.
- 鈴木泰 (1999) 『古代日本語のテンス・アスペクト』改訂版 ひつじ書房
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 土肥哲 (研究代表者) (1998) 『就労を目的として滞在する外国人の日本語習得過程と習得にかかわる要因の研究』平成 6-8 年度科学研究費研究成果報告書
- 西本晃二 (1982) 『現代のフランス語』三省堂
- 西由美子・白井恭弘 (2000) 「アスペクト辞『ている』の意味 - 会話コーパスの分析から」第二回音声言語シンポジウム発表原稿, 東京工業大学 12月22日
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 松井三郎 (1972) 『フランス語文法の初歩』白水社
- 吉川武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 155-327.
- Andersen, R. & Shirai, Y. (1994) Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 133-156.
- Antinucci, F. & Miller, R. (1976) How children talk about what happened. *Journal of Child Language*, 3, 167-189.
- Bardovi-Harlig, K. (1999) From morpheme studies to temporal semantics: Tense-aspect research in SLA. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 341-382.
- Bardovi-Harlig, K. (2000) Tense and aspect in second language acquisition: Form, meaning, and use. *A Supplement to Language Learning*, 50: Supplement 1, 341-382.
- Bardovi-Harlig, K. & Reynolds, D. W. (1995) The role of lexical aspect in the acquisition of tense and aspect. *TESOL Quarterly*, 29, 107-131.
- Bloom, L., Lifter, K. & Hafitz, J. (1980) Semantics of verbs and development of verb inflection in child language. *Language*, 56, 386-412.
- Bronckart, J., P. & Sinclair, H. (1973) Time, tense and aspect. *Cognition*, 2, 107-130.
- Comrie, B. (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press. (山田小枝訳 1988 『アスペクト』むぎ書房)
- Comrie, B. (1990) *The world's major languages*. Oxford: Oxford

- University Press.
- Ellis, R. (1994) *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Gass, S. & Selinker, L. (2001) *Second language acquisition: An Introductory course, second edition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Ishida, M. (2001) The effect of recasts on acquisition of aspect in JFL. Paper presented at the 4<sup>th</sup> Pacific Second Language Research Forum at Hawaii, October 5.
- Jacobsen, W. (1992) *The transitive structure of events in Japanese*. Tokyo: Kuroshio.
- Krishnamurti, Bh. & Gwynn, J. P. L. (1985) *A Grammar of modern Telugu*. Oxford: Oxford University Press.
- Klein, W., Dietrich, R. & Noyau, C. (1995) Conclusions. In: R. Dietrich, W. Klein, & C. Noyau (Eds.), *The acquisition of temporality in a second language*. Amsterdam: John Benjamins, 261-280.
- Li, P. & Shirai, Y. (2000) *The acquisition of lexical and grammatical aspect*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Rajeshwari, V. P. (1997) *Marathi*. NY: Routledge.
- Robison, R. (1990) The primacy of aspect-aspectual marking in English interlanguage. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 315-330.
- Shibata, M. (1998) The use of tense-aspect markers in a Brazilian worker's Japanese. 『*沖縄大学地域研究所紀要年報*』 11, 45-63.
- Shibata, M. (1999) The use of tense-aspect morphology in L2 discourse narratives. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 2, 68-102.
- Shirai, Y. (1991) *Primacy of aspect in language acquisition: Simplified Input and prototype*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- Shirai, Y. (1993) Inherent aspect and the acquisition of tense-aspect morphology in Japanese. In Nakajima, H. & Otsu, Y. (Eds.) *Argument structure: Its syntax and acquisition*. Tokyo: Kaitakusha. 185-211.
- Shirai, Y. (1995) Tense-aspect marking by L2 learners of Japanese. In D. MacLaughlin & S. McEwan (Eds.), *Proceedings of the 19th Annual Boston University Conference on Language Development*, vol.2. Somerville, MA: Cascadilla Press. 575-586.
- Shirai, Y. (2000a) The semantics of the Japanese imperfective -teiru: An integrative approach. *Journal of Pragmatics*, 32, 327-361.
- Shirai, Y. (2000b) The Aspect Hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. 『*第11回第二言語習得研究会全国大会予稿集*』 101-112.
- Shirai, Y. (2001) The Aspect Hypothesis: A universal of SLA, or L1 transfer? Paper presented at the 4<sup>th</sup> Pacific Second Language Research Forum at Hawaii, October 5.
- Shirai, Y. (in press-a) The Aspect Hypothesis in SLA and the acquisition of Japanese. *Acquisition of Japanese as a Second Language*, 5.
- Shirai, Y. (in press-b) The prototype hypothesis of tense-aspect acquisition in second language. In R. Salaberry & Y. Shirai (Eds.), *Tense-aspect morphology in L2 acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.
- Shirai, Y. & Andersen, R. (1995) The acquisition of tense-aspect morphology. *Language*, 71, 743-762.
- Shirai, Y., & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48, 245-279.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press. 97-121.
- Weinert, R. (1995) The role of formulaic language in second language acquisition: A review. *Applied Linguistics*, 16, 180-205.

すがや なつえ / お茶の水女子大学大学院 応用日本語論講座  
letonatsu@yahoo.co.jp



# A survey of the acquisition of aspect morphology in L2 Japanese

- Focusing on the progressive and the resultative state use of *-teiru* -

SUGAYA Natsue

## Abstract

The purpose of this paper is to summarize the acquisition research in the Japanese aspect marker *-teiru*, focusing on the progressive and the resultative state use and to suggest further research. First, I outline the tense-aspect system of Japanese and then review the previous research. The review includes, firstly, studies on the Aspect Hypothesis, which predicts the relationship between the development of tense-aspect morphology and inherent semantics of verbs in both L1 and L2 acquisition and secondly, studies on the acquisition order investigating the progressive and the resultative state use of *-teiru*.

【Keywords】 *-teiru*, the Aspect Hypothesis, naturalistic learning, formulaic language, L1 influence

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)